田辺聖子
長篇全集

ダンスと空想

聖子長篇全集

17

ダンスと空想

田辺聖子

文藝春秋

田辺聖子長篇全集　17

ダンスと空想

一九八一年八月一日第一刷

定価　一八〇〇円

著者　田辺聖子

発行者　杉村友一

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷

製本所　矢嶋製本

製函所　加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

© Seiko Tanabe 1981　Printed in Japan

ダンスと空想　5

解説　中山千夏　331

装幀　灘本唯人
AD　坂田政則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

田辺聖子長篇全集第十七巻

ダンスと空想

はしゃぎざかり

新聞記者のハッちゃんこと、八田青年が、
「ファッションショーはいつやったっけ？」
と店をのぞいたとき、私はおかしかった。
彼も、夢の中にでてきたんだ。
この頃、私は仕事で疲れすぎているせいか、よく夢をみる。たいてい、明け方にハッキリした夢をみることが多い。そうして、わりにケンカするとか、言い合いをするとか、そこまでハッキリしていなくても、漠然とした悪意にみちてる、とかいう夢が多い。しかしハッちゃんとはケンカした夢ではなく、友好ムードにみちた夢だったようにおぼえている。
ハッちゃんは地もと新聞「兵庫タイムス」の学芸部の記者である。三十ちかい独身の気のいい青年で、ファッション関係も彼の係りになっている。
「兵庫タイムス」は兵庫県を押えている有力新聞で、県下のどんな辺鄙なところにもかなり浸透している。県下では長い馴染みのある新聞で、人々に愛読されてるけれど、ただ一つわるいところ、私たちにいわせると、
「オナゴの記者の人、なんで使わへんの」
という文句があるのだ。男ばっかりで寄ってたかって「男手」でつくってる新聞なんか、
「オナゴに読まそ、いうほうがむりやないのさ」
といって、ハッちゃんをいじめるのである。
むろん、ハッちゃんが「兵庫タイムス」を持っているわけではなく、婦人記者を採用しないのはハッちゃんの考えではない。新聞社のトップの方針なのだから、ハッちゃんに責任があるわけでもない。そうして、ハッちゃん自身、性差別意識はないのだから、彼にいうのはお門ちがいなのだが、まあ、ハッちゃんには言いやすい、ということだ。
ハッちゃんは、私たちがそういっていじめると辟易して、
「かなんなあ。ナカザワはんにいうてえな、それは」
というが、「ナカザワはん」というのは「兵庫タイムス」の社長である。コーベはパーティの多いまちなので、何かのパーティでよく見かけることはあるが、「ナカザワはん」が、女性差別論者かどうかはわからない。
しかしハッちゃんに、いろんなことをいっていじめやすいのと同様に、「兵庫タイムス」はそんないちゃもんをつけたくなるほど、地もとの人から親しまれているというわ

けである。
私たちに関係のあるのは、おもに、「兵庫タイムス」の学芸部で、ここは私たちだけでなく、町の文化関係の人々のたまり場や待ち合せ場所のようになっている。
学芸部長の大波さんが、いつもいて、
「やあ。こんどはなんのパーティですか」
なぞというのである。まるで私はパーティ屋みたいだ。だけど、私たちの仲間「ベル・フィーユ」がいないと、どうにも会の熱気が盛り上らないというので、何かというとひっぱり出されるから、パーティ屋と思われてもしかたないところはあるけど。
そうしてまた、コーベの人はパーティ狂いであって、たとえば誰かが受賞をすると、
「受賞しなくてもよかったが、やっぱり受賞した方がよかったパーティ」
になるし、落ちるとむろん、
「くやし泣きパーティ」
「落選祝賀パーティ」
である。勤続何十年表彰、なんてことであると、「十年一日パーティ」、であり、退職すると、
「ご苦労さんでしたパーティ」
であり、銀婚式でもあると、
「〇〇さんの銀婚式を肴にするパーティ」
会社をやめて独立すると、
「乳離れを祝うパーティ」
この前は、
「台風が逸れたお祝いパーティ」
というのもあった。まともに台風がきていたら、
「やけくそパーティ」
というのをやっていたかもしれない。コーベのまちの人は、グループごとにみな顔見知りだから、
「会費なんぼ。どこで。会の名称と顔ぶれは」
というのがわかりさえすれば、パーティの性格のアウトラインがつかめる。手帖をみて、ほかのパーティとかち合わなければ、「いく」といえばすむのである。
大波さんは仕事の性質上、あちこちへ顔を出すので、人の顔さえみると、
「こんどはなんのパーティや」
といい、回転椅子をくるりと廻して、うしろの戸棚から、ウイスキーの壜なんか持ち出してくる、(もっともこれは夕方、学芸部へ寄ったとき)そのせいで、この部屋は「バー・三階」なんて呼ばれている。学芸部は三階にあるからだ。ホカの、社会部とか経済部とかは大部屋であるが、この学芸部だけは独立して、二十人ばかり入ってる小ぢんまりした個室を与えられているので、「バー・三階」なんてのが存在できるわけである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

でも私は、残念ながらお酒がイケナイ。
グループの三分の一は、お酒がイケナイ。
三分の二が、お酒を楽しめる人、あとひとにぎりほどは、男顔負けの酒豪、というところ。私はたいてい、大信田さんと一緒だが、この人は、ややいけるほう。私のほうは、濃縮ジュースを水でうすめたのを飲んだりして大波さんと話したり、部屋で仕事している人たちとしゃべったりして、用件をすませ、帰ってくる。大波さんは接待と称して、これは自分で水割りをつくって飲む。
「バー・三階」では、ひけどきになると、誰か彼か来ているという状態で、それも一つには大波さんの人柄のせいもあるだろうけれど、「バー・三階」ひいては「学芸部」ひいては「兵庫タイムス」は、地もとの人（おもにコーベ市の人々）にそれだけ親しまれている証拠のように思う。
大波さんは四十五、六で、ずんぐりと背の低い、童顔の人である。もう学芸部長を長くしていて、私たちとも古いつきあいだった。
「ベル・フィーユ」のお姐さまがた、などといって、私たちをいい気分にさせてくれる。
「ベル・フィーユ」というのはべつに、バーの名前でも何でもなく、私たちのグループの名前である。ハッちゃんがつけた名前で、「美少女」という名前のフランス語だというのだけれど、ハッちゃんは大学の仏文科出だというのに、だれかに、
「おい、フランス語ォいうのは、エービーシーいわんと、アーベーセーいうねんてなァ」
とふしぎそうに聞いたという伝説があるくらいだから、「ベル・フィーユ」が正確に「美少女」だかどうか、わからない。グループは十人くらいいるけれど、誰もフランス語にくらいのでよく知らない。私は以前、フランスのファッション誌を読むのも仕事のうちと思って、フランス語を勉強しかけたけれど、忙しくなってやめてしまった。
オートクチュールのアトリエをやっている私、カオル。
女流シナリオライターの大信田さん。
ブティックを経営しているけい子。
ミニコミ紙「港っ子」の女編集長、平栗ミドリ。
ニットデザイナーの青柳みち。
手芸家のモト子さん。
テレビディレクターの阿佐子さん。
モダンダンスの雪野さくらさん。
そんな人が「ベル・フィーユ」のグループである。平均年齢は三十四、五ぐらいかな。
大波さんが「ベル・フィーユ」のお姐さまがた、と尊称をつけてくれるだけの貫禄のある年恰好、というところ。
尤も、そういう、理解ある好中年の大波さんにくらべ、片一方では、毎朝新聞のコーベ支局長の竹本さんみたいに、

「あんな大年増にモテたってしようがないじゃないか」
と不敵にうそぶくのもおり、竹本さんはべつに私たちの前で、挑戦的にそういったのではないが、そこは狭い町のことだから、どんなに陰でいったって、私たちにつつぬけになるわけ、
「何さ、けしからんやないの、毎朝新聞が何さ」
と大信田さんはいきっていた。
「もう、毎朝新聞なんか、読んだるかいな、あんなもん」
「そや。この前のファッションショーかてとり上げてくれへんかったし」
「記事が偏向してると思えへん？」
「不親切やわな、すべてにわたって」
「竹本さんはエリートコースめざしとうさかい、早よ栄転したいねん」
「転勤地に愛着ないねん」
「毎朝支局の建物の色も、あたし、前から気に喰わん、思うてた」
「あんな新聞、不買や。不買運動や」
などと発展してゆく。みな働きざかりの女たちばかりで、商店街の役員さん、市役所の局長さんなんかとも顔なじみなので、私たちがワルクチをいうと、町じゅうに、かなりの広い波紋をひろげてしまう。
竹本さんは悪気はないのだろうけれども、私の見るところ、あまりにも、モノを知らなさすぎるところがある。そうしてそれは、エリートコースのお皿に乗って、そのまま上へ直通でのぼってゆくたぐいの人、ひやめし食わされるとか、スカタンばかり味わうとかの目にあったことのない人の、率直さであるように思われる。
同じモノのいい方でも、竹本さんみたいに直截にむきつけに飾りけなくいったのでは、ぶちこわしである。竹本さんは、怖いもの知らずというべきかもしれない。
竹本さんは、東京本社からコーベ支局へ来るそうそう、この町には「ベル・フィーユ」マフィアというのがあり、「めったなことで、この怖いオバハンらのワルクチ、いうたらあきまへんで」と釘をさされてるにちがいないのである。しかし竹本さんは気にもとめず、鼻にもひっかけてなかったにちがいない。
竹本支局長は大波さんよりずっと若くて、がっしりした体の男前、如才なくて彼の出席するパーティは、主に県会、市会の関係やら、商工会議所の関係が多く、つまり、政治家や経済人だけに関心があるようであった。
かつ、「夜の商工会議所」または「夜の市役所」「夜の県会」といわれるような、要人のあつまるバーに、よく顔出ししていて、文化人や女こどもには、あんまりつきあいもなく、つきあう気もないみたい。
それで、竹本さん自身は知らないから平気なのかもしれ

ないが、彼につながる毎朝新聞まで、目のカタキにされ、女性連に、
「不買運動や」
なんて、かげ口を叩かれてるのである。
そのへんが、この町の小さくまとまった面白いところでもあり、偏狭さでもある。
みんなパーティへいくと、ナアナアで仲よくしているが、むろん、それぞれ商売仇で、下では張り合ってるわけ、私たちはどうしても、地もとに密着した「兵庫タイムス」に肩入れして、大波さんのところへ寄りたがるのであるが、いつか、これも誰かのつげ口で、
「竹本さんがさ、『兵庫タイムス』のことを『カンベ村役場・広報部』とワルクチいうたんやて」
ということもひろめられた。
まさか、そんなオトナ気ない放言はしないだろうけど、(カンベ村というのは、コーベは百年前までそうよばれていた、小さい漁村だったからである)でも、私たちのことを、彼が、
「あんな大年増にモテたってしようがないじゃないか」
といったのは、ほんとうかもしれないのだ。
竹本さんなら、いいそうな感じだからだ。
くわしく竹本さんとつき合ったわけではないが、どうも彼は、いつも忙しそうである。

そして、絶対、パーティの終りまでいたことのない人。新聞社の人というのは、何でも広く浅く、というのがモットーのように思われるから、それも当然の配慮であろうけれど、私たちが顔を出すようなパーティには、もう全く、一、二分もいいとこ、万遍なくずっと顔を見せ、いそがしく口早に、
「やあ、これは」
「いやあ、どうも」
と如才なく挨拶して、スッと消えてしまう、そうして政界人、財界人のパーティには、ずうっと長く腰おちつけてしゃべりこむようである。
「兵庫タイムス」の人は私たちのパーティにはたいてい、顔をみせている。ハッちゃんなんかだと、会の設営まで手伝い、大波さんは、腰おちつけてマイクで歌を唄う。
そういうのを見なれているので、竹本さんのように忙しい男だと「大年増」という侮辱的言辞が出やすいように推量するわけである。忙しい男は、ちょっと見のきれいなものにしか、心をひかれないからである。
従って、若い子にしか、目がいかない、ってこと。
「あんな大年増」
という不用意な一言で、はしなくも竹本さんの全人格が露呈してしまった。忙しがりの人間は、楽しむことも下手じゃないか、ということまで看破されてしまう。

そうして、ここコーベでは、楽しむことの下手な人間は、気の毒がられ、足もとを見られ、内かぶとをみすかされてしまうのである。

竹本さんは、私たちにあうと如才なく、

「やあ、カオルちゃん。元気ですか、こんどボートピアの……」

なんて取材するけど、毎朝新聞なんかに協力してやるもんか。何しろ忙しそうに私にいう言葉の、あと半分は、となりにいる大信田さんに話しかけて、

「そうそ、ゆうべ、大信田さんのドラマ、僕、見られなかった。見ようと思っているうちについつい、寝てしまって」

などという。どうせ見るつもりないくせに、と大信田さんもいっている。

しかし竹本さんは、そういう私たちの気持が分らないらしい。

「コーベへ来て一年たちました。マスマス、いい町だと思うねえ」

などといいつつ、眼はきょろきょろと、私たちの頭ごしに、あら手の顔見知りをさがしている。そうしていそいで次の人間に、

「や、どうも」

と挨拶して寄るのである。尤も、そういうのは、竹本さんだけでなく、いつかはコーベをはなれてゆくサラリーマンの宿命みたいなところがあり、任地にいる期間、彼としては精いっぱい、つとめているのかもしれない。

しかしそれは、大波さんだって同じのはずだが、なぜか大波さんは、じっくりと、人と会う雰囲気や、会そのものの華やぎをたのしんでいる気がされる。記者のハッちゃんもそうである。ハッちゃんが酔っぱらって、「襟裳岬」などパーティで歌うのを何度も見るけど、その姿には、

(ああ、おもろいなあ)

(おい、オレはおもろうてたまらんよ)

というような、切ないほどの溺れこみかたが感じられる。

それであればこそ、

(ハッちゃん。大丈夫?)

と私たちは手をさしのべて介抱してやり、

(これは『ベル・フィーユ』マフィアのお姐さまがた。おおきに、大丈夫です。酔うてまへん。ハイ)

などとハッちゃんも快さそうに甘えるのである。その頃にはすでにもう、パーティはダンス会場に変じていて、ボーイさんたちも心得て、テーブルなどを壁の方へ寄せている。

バンドが、ここを先途と、サンバでわめきたてていて、みんな踊り出しているという寸法、私や大信田さんのいつものプラン通り、パーティは成功してる、ってわけである。

そうしてハッちゃんは浮かれてテーブルに立ち、
「カンベ村万歳！」
と三唱しているのである。
まあ、たいていの人は、こういうふうに気持よく溺れて、それはつまり、私の感じでいえば、たのしみに、
「淫する」
という風なんだけど、私はフランス語はむろん、国語も自信あるとはいえないので、そういう、いい方が合ってるかどうか分らない。
溺れてる、というより強い感じであるのだ。
そういうのが、大なり小なり、コーベの人にはあり、そこが私は大好きなのだ。そして、みんなそうなのだ、人間なんて、楽しいときにはそうなんだ、と思っていたが、そんな人ばかりではないことがわかった。——竹本さんみたいに、いつも、
「浮足立ってる」
人もあるのだから。
ところでハッちゃんを見て思い出したんだけど、私は竹本さんの夢も見たんだ。
なぜか、竹本さんと私はケンカしていた。
何か私が誤解し、彼に、彼の前にある上等の（と思われる）高価なワレモノ（それは壺か鉢か分らないが）を、指さして、割ってもいいか？　と私は聞いた。
（どうぞ）
竹本さんは、唇をゆがめて笑って、静かにいった。髯の剃りあとの青い彼の笑いは、傲慢であった。私は片はしから、高価なワレモノを割った。あとで、（なぜかいきさつは分らないが）私の誤解だったらしい、とわかった。はずかしくて竹本さんに顔を合せられない。——そういう、ヘンな夢である。竹本さんに現実では、なんの弱みもないのに。
もちろん、竹本支局長を私たちは憎んでる、というのではなかった。
私たちのグループ「ベル・フィーユ」は男性が大好きなんだし、仕事をしていく上でも男の人たちに世話になるし、また男の人たちに、
「カオルちゃん、協力してくれへんかなあ」
といわれると、
「よっしゃ」
と引き受けてあげる。あるいはスグ電話をかけて、
「ちょっと、市役所の経済局長さん、こない、いうてはったよ」
と方々へ知らせたり頼んであげたり。あるいは何かのショーの裏方さん、下働きを引き受けたり。
私たちデザイナーたちも、ファッションショーを一年一回やっていた初期のころ、（このグループは、「ベル・フィ

ーユ」とはべつであって、仕事の上での仲間の集まりである）あんまり経費がかかるので、私たちはやりきれなくなって、

「ちょっと。なんでこない、あたしらだけが苦労せんならんのん。コーベはファッション都市にしよう、いうて売り出してるのんちがう？　あたしらかて、そのパワーの一端を担うてるのやさかい、男の人にチーとばかり助けてもろてもええ、思うわ」

「そやそや」

といいあった。

それで私は市役所の市民局へたずねていった。なぜというと、ここの局がいちばん親しいからで、毎年のコーベ祭に企画の会合でよくくるからだ。そこでは、

「そら経済局と相談したらええやろ」

といってくれて、またもやノコノコと私はそこへいった。コーベの男の人の面白いところは、役人さんでも、役人というより、男の人、という感じで、

「何やねん、どないしてん、『ベル・フィーユ』のお姐さんがマジメな顔してきたぞ」

といって、スグ会ってくれることだ。パーティ会場でいつも会っているから、というだけでなくて、だれもあんまり威張ったり、物々しくかまえたり、しない。これでみても、あんまり人口ばかりふえてお役所がやたら、つまらぬことで忙しくなるのはやめた方がいいと思う。「ベル・フィーユ」の会でもいつもいっていることだけど、

「人口ふえるのんと、活力ある、いうことは別やんか、なあ」

ってことだ。人口なんぼんめになった、ということばかりいう人もいるが、私たちとしては、

「もう、あんまり人口、ふやさんといて下さいよ、あんまり大きな町になったら、かえって無性格になってしまいますやんか、市長さん」

と、コーベ市長にパーティで会うと、文句をいっているのである。そんなことを、われわれ女の子たちがパーティで市長さんにいえるところが、この町の面白いところだ。

経済局で、「マジメな顔して」といわれたけど、私、べつにマジメな顔なんかしていない。マジメになるのは新しくできたレストランへいって、最初のひとくちを味わうときだけ、だいたいコーベの街って、マジメな顔は似合わない。この街には青空が似合うように、いつも微笑の波紋のある顔が似合う。

私が、男の人に、

「チーとばかり助けてもろてもええ、思うわ」

という話をしたら、じっと聞いてくれていた局長さんが、

「そやな。わかった、紹介状書いたげるさかい、商工会議所へいき」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com